# 母なる神様

### 2017年10月15日

### 逗子例会

### スワーミー・メーダサーナンダによる講話

### 於・逗子協会

8人の信者さんと一緒にインド巡礼から戻ってきたばかりです。旅行中、たくさんのお寺に行きました。中でも、南インドにある、母神を祭った3つのお寺がとても有名です。まず、タミル・ナードゥ州のチェンナイに近いカーンチープラムにあるカーマクシ母神を祭っているお寺、それから同じくタミル・ナードゥ州のマドゥライ市にあるミーナクシー母神のお寺、そしてやはり同州のカンニャークマリ市にあるカンニャークマリ母神のお寺です。

インドのヒンドゥ教の伝統では、母なる神様、母神に祈りを捧げ瞑想することが広く行われています。キリスト教の伝統では、イエス・キリストが信仰の一番の対象ですが、聖母マリアへの信仰もよく見られます。南米や北米では聖母マリアが信仰の中心となっている地域もあります。キリスト教の聖母信仰はインドの伝統と似ているところがあるようです。しかし、インドの母神信仰はより深く、深遠な哲学に根ざしています。日本では女神に祈ることはあまりないですが、神道の天照大神や仏教の観音様（訳者注：女性と見られることが多い）への信仰が見られますね。

## 母神信仰の概念

インドにはシヴァやヴィシュヌを祭る寺がたくさんあるかもしれませんが、例外なく、近くに母神を祭った寺があるか、そうでなければシヴァやヴィシュヌの寺そのものの中に母神の像が置かれています。シヴァ寺院であればパールヴァティかドゥルガーの像があるでしょうし、ヴィシュヌ寺院ならラクシュミーの像が、ラーマの寺ならシーターの像があるでしょう。このようにインドではあらゆるところに母神の影響が見られます。

母神信仰の哲学的基礎は、サーンキヤ哲学の宇宙論、すなわち宇宙の創造の2つの原理にあります。この原理とはプルシャとプラクリティです。プルシャは純粋意識、プラクリティは力またはエネルギーです。プルシャの存在下でプラクリティは創造し、維持し、破壊します。ヴェーダーンタでは、プルシャはブラフマン、プラクリティはマーヤーまたはシャクティと呼ばれますが、ブラフマンとマーヤーは別のものではなく同一の原理であるとされています。ブラフマンはこの原理が活動していない状態のときの呼び名で、活動しているときにはマーヤーと呼ばれるのです。言い換えると、ブラフマンには2つの面があり、一方は「現れていない」状態、すなわち「絶対の真理」であり、もう一方は「現れている」状態です。この現れている面が、創造、維持、破壊を行います。

タントラでは、マーヤーまたはマハーマーヤーには2つの面があります。「現れていない」面はヴェーダーンタのブラフマンと同様で、「現れている」面はマハーマーヤーではあるもののドゥルガー、カーリー、チャンディー、パールヴァティなどの他、先ほどタミル・ナードゥ州のお寺の名前として挙げた様々な名前で呼ばれます。これらはすべて現れることもできるし現れないこともできるのです。たとえば、ドゥルガーは純粋意識、絶対の真理になることもできるし、もう一つの面として創造、維持、破壊を行うこともできるのです。カーリーの場合も同様です。

ラームプラサードの歌や『ラーマクリシュナの福音』の中に、こうした概念の説明が見られます。『福音』の中でシュリー・ラーマクリシュナは、カーリーとブラフマンに違いはないと説明しています。が、ヴェーダーンティストの中にはカーリーをあまり崇敬しない人がいますし、カーリーやドゥルガーの信者はヴェーダーンタのブラフマンの思想をあまり信奉していません。つまり、ヴェーダーンティストはギャーナ・ヨーガの道を歩み、バクタはバクティ・ヨーガの道に従っているのです。これが原因で、バクタとギャーニの間で意見が食い違うことがあります。シュリー・ラーマクリシュナは、実はこの2つ道（原理）にはそのような違いが生じることはないと言われ、有名な歌の歌詞「カーリーはブラフマンでブラフマンはカーリーだ」を引用されました。現れていないときのカーリーはブラフマンで、現れているときのブラフマンがカーリーと呼ばれるのです。これはシンプルで分かりやすいですし、真実でもあります。シュリー・ラーマクリシュナはヴェーダーンタもタントラも実践されてカーリーとブラフマンは同じだと分かっていらっしゃるので、「なぜそれぞれの信者は互いに言い争うのだろう」と言われました。

## マハーマーヤー

『チャンディー』という本があります。『バガヴァッド・ギーター』が叙事詩『マハーバーラタ』の一部であるように、『チャンディー』も『マールカンデーヤ・プラーナ』というプラーナの一部です。『チャンディー』の中にはマハーマーヤーすなわち母神の性質を説明する詩がたくさんあります。

皆さんも知っているとおり、『マハーバーラタ』の中にはパーンダヴァ家とカウラヴァ家の戦いの物語があります。パーンダヴァ家のアルジュナは偉大な英雄であると同時にとても道徳的な人間です。戦闘が始まる直前、アルジュナは自分の役割について迷いが生じます。カウラヴァ軍に加わった親族を殺さなければならないのだろうか、と考えます。親族を殺すことに限らず、相手が誰であろうと人を殺すことは大罪になるからです。アルジュナは自分の戦車の御者である主クリシュナにこのジレンマを訴え、戦闘に参加して相手の軍勢、特に親族に当たる人を殺すべきではない様々な理由を述べます。

一方、カウラヴァの王は大変邪悪な人間ですから、武人の階級クシャトリヤのカーストに属するアルジュナは、邪悪な人間やその支持者を討ち取る義務があります。アルジュナはクリシュナに訴えます。「主よ、私の知性は惑わされています（moha。幻惑）。私の為すべきことについて私をお導き下さい」

## 聖典『チャンディー』

『チャンディー』にはスーラタ王の話が出てきます。自軍が敵に打ち負かされたスーラタ王は王国の首都に戻りました。王の大臣らは、このように弱い王では王国の統治を続けることはできないと判断し、政権を掌握します。王は、狩りの旅に出かけたふりをして森の中に入りました。この森で王は、メーダスという名の賢者が住む庵を見つけました。庵の雰囲気が静かで穏やかなのを見て良い印象を受けた王は、周囲を見てから賢者メーダスに敬意を表しに挨拶しに行こうと決めました。しかし、庵の周りを歩いて建物の様子を見ながらも、王は家族や王国、ペットの象、貯金、首都で起きていることなどが心配でなりません。

突然、王の目の前に、とても悲しそうな顔をした男が現れました。王は、名前を尋ね、なぜそんなに悲しく心配そうなのか聞きました。男は答えました。「私はサマーディと言い、ヴァイシャ（商人）のカーストです。かつては大変裕福でしたが、欲深い妻と息子に家から追い出されたのです」王は、サマーディがまだ家族を心配しているのを知って驚き、むしろ怒るべきだと言いました。「おっしゃる通りです。でも、怒りが湧いてこないのです」とサマーディは答えました。

王とサマーディは、賢者のところに一緒に挨拶に行きました。王は賢者に、自分は大臣たちから追い出されたけれど今でも宮殿や王国に何が起きているか心配だと説明しました。さらに王は、サマーディが家族に追い出されてもなお家族が無事に暮らしているかどうか心配していることも話しました。自分たちはそんなことを案ずるべきではないと分かっているが、あまりに執着が強いため悲しみを感じるのだと言いました。「私たちはなぜこのように強い幻惑に苦しめられるのでしょうか」王は尋ねました。

## マハーマーヤーの性質

皆さん、私たちも同じような疑問を持ちますね。賢者は答えました。「マハーマーヤーの影響で人は皆、惑わされています。しかし、幻惑から解放してくれるのもマハーマーヤーです。マハーマーヤーは無知な者や多くの普通の人々を惑わすだけでなく、賢いギャーニさえも幻惑します。彼女にはそれほどの力があるのです」

王は尋ねました。「マハーマーヤーとは誰なのですか。どのようにして生まれたのですか。どのような性質を持っているのですか」

賢者は言いました。「マハーマーヤーは永遠なる存在で、この宇宙は彼女の現れです。彼女は遍在ですが、神の姿を取って何度も繰り返し現れます。様々な使命を果たすために現れるのです」つまり、マハーマーヤーは永遠の存在であるけれど、別の面では「生まれる」存在なのです。『バガヴァット・ギーター』では、同じことが「アヴァターラ」すなわちブラフマンの化身という考えで説かれています。シュリ－・クリシュナは、ブラフマンはダルマ（正義、法）を打ち立て、邪悪な者たちを罰し、霊的完成の道を歩む信者らを導くために何度も何度も生まれてくると説明しています。同じように『チャンディー』では、母なる神が実はブラフマンであり、ブラフマンは同じ霊的使命を果たすためにマハーマーヤーとして現れると説かれているのです。

## 母は応えてくださる

次に賢者メーダスはマハーマーヤーの物語を始めました。悪魔（アシュラ）らと神々との間には常に戦いが行われています。神々が勝利するときもあれば悪魔たちが勝つこともあります。天国には最大の楽しみを与える物と場所があるため、悪魔側が勝つと天国を乗っ取って神々を追い出します。神と悪魔の違いは、悪魔は利己的で感覚の楽しみだけを信じており道徳の感覚がありませんが、神は感覚の楽しみを経験することがあってもそれが自身にとって最も重要ではないという点です。神はブラフマンの存在を信じているので霊性の観念もあり、そのハートはより純粋です。悪魔に比べてはるかに大きい信仰心、崇敬の念、純粋さを持っています。また、神は人間の利益と幸福を考えます。現代の世界を見回してみると悪魔の性質を持っている人がたくさんいることが分かりますね。見た目は人間でも悪魔の性質を持っている人もいれば、見た目は人間、性質は神のような人もいます。

ある時、天国から追い出された神々がマハーマーヤーに、悪魔から守って下さいと祈りました。するとマハーマーヤーが現れて悪魔を退治し、これからも助けを求めて自分を呼べば必ず来ると神々に約束しました。この約束は何度も守られています。

## 『チャンディー』の賛歌と詩

『チャンディー』の賛歌の多くは、母なる神様を称えてその偉大な栄光を詳細に物語るという内容です。その大まかな意味は、「命のあるものもないものの私たちが目にするものすべてが、実はマハーマーヤーの様々な現れである」というものです。良いもの、悪いもの、純粋なもの、純粋でないもの、すべてのものがマハーマーヤーです。束縛するのも解放するのもマハーマーヤー。何を祈ろうと、その祈りを叶えるのもマハーマーヤー。どれほど危険な状況に置かれようと、マハーマーヤーに祈れば助けてくださいます。人間である以上、苦しみに終わりはなく問題がなくなることもありません。母神のお寺は祈る人たちでいつもいっぱいです。これから『チャンディー』の賛歌の大まかな意味を翻訳して皆さんにお聞かせしましょう。

母なる神よ、あなたにプラナーム（礼拝）します

あなたはいつも私たちによくしてくださいます

だからあなたにプラナームします

あなたは創造する者

あなたにプラナームします

あなたは維持する者

あなたにプラナームします

あなたに何度も何度もプラナームします

あなたは破壊する者

あなたにプラナームします

あなたは永遠なる者

あなたにプラナームします

あなたは穏やかで静かです

あなたにプラナームします

あなたは美しく喜ばしい

あなたにプラナームします

すべての成功はあなたです

すべての成長はあなたです

あなたは女神ラクシュミー

（幸運と不幸の女神）

あなたにプラナームします

私達が世俗の大海を渡れるのもあなたの助けがあるからです

あなたはエネルギーの現れそのもの

ある面ではとても穏やかで静かであられ

ある面ではとても激しくあられます

あなたはこの宇宙の避難所です

あなたは活動の形も取られます

あなたはマーヤーです

あなたにプラナームします

あなたはあらゆる存在の中に意識という形でおられます

あなたにプラナームします

あなたはすべてのものの中に知性という形でおられます

あなたにプラナームします

あなたに何度も何度もプラナームします

『バガヴァッド・ギーター』第11章に述べられているように、神々はマハーマーヤーにプラナーム（敬い拝むこと）をしました。この章でクリシュナは自身の普遍相、宇宙的形相をアルジュナに見せ、主の計り知れぬ大きさを知ったアルジュナは恐れおののきます。アルジュナはそれまでクリシュナを友人と見なしていました。クリシュナが主であることを知ってはいたものの、アルジュナには神の真の性質を推し量ることができなかったのです。クリシュナの宇宙的形相を見て初めて、クリシュナの偉大さ、計り知れない大きさに気づいたのです。アルジュナはシュリ－・クリシュナに対し、四方から繰り返しプラナームをして祈りを捧げました。

聖典『チャンディー』には、「おお、マハーマーヤーよ、あなたはあらゆる人の中に眠りという形でおられます。あなたにプラナームします」と書かれています。

 ではまた『チャンディー』を読みます。

母なる神よ、あなたは食欲という形でおられます

あなたにプラナームします

あなたは影という形でおられます

あなたにプラナームします

あなたはシャクティ（力）という形でおられます

あなたにプラナームします

あなたは喉の渇きという形でおられます

あなたにプラナームします

あなたは許しという形でおられます

あなたにプラナームします

あなたは様々なカーストという形でおられます

あなたにプラナームします

あなたは恥という形でおられます

あなたにプラナームします

ここの「恥」の意味に注意しましょう。人は時折、他人からどう思われるかを気にして正しいことをやらないことがあります。例えば、瞑想は私たちのためになることですが、家族にどう思われるかが心配で瞑想をしません。このような「恥」の気持ちは良いことではありません。このようなことは実際にありますね。霊的な実践をしたいと思っていながら、誰かにからかわれるのが嫌でやらないのです。お寺に行ったり霊的な実践をしたりするのが自分のためになると分かっていても、恥ずかしくてやらないのです。良いと思うのならやってください。人がどう思うかなど気にしないでください。また、「恥」には、悪いことをしたことから生じる気持ちもありますね。

『チャンディー』の続きを読みます。

母なる神よ、あなたはあらゆる人の中に平安という形でおられます

あなたにプラナームします

あなたは他者への敬意という形でおられます

あなたにプラナームします

あなたは美という形でおられます

あなたにプラナームします

あなたは富という形でおられます

あなたにプラナームします

あなたは様々な職業という形でおられます

あなたにプラナームします

あなたは記憶という形でおられます

あなたにプラナームします

あなたは親切と思いやりという形でおられます

あなたにプラナームします

あなたは満足という形でおられます

あなたにプラナームします

あなたはあらゆる人の中に母という形でおられます

あなたにプラナームします

ここで「あらゆる人の中に母という形で」と書かれていることに注意しましょう。女性だけでなく男性の中にも母という形でいるのです。男性の中にも女性的な性質があり女性の中にも男性的な性質がありますから、すべての存在の中に母という形でいると謳（うた）うこの賛歌は真実ですね。

興味深いことに、賛歌は次のように続きます。

母なる神よ、あなたは人の中に過ちという形でおられます

あなたにプラナームします

あなたはすべての感覚という形でおられます

あなたにプラナームします

あなたはすべての要素であられます

あなたにプラナームします

あなたはブラフマンであられます

あなたにプラナームします

あなたは意識であられます

あなたにプラナームします

このようにマハーマーヤーは、ブラフマンが遍在しているのと同様に、すべてにあまねく広がっています。ブラフマンは永遠で無限ですが、マハーマーヤーも同じように考えられています。ドゥルガー、カーリー、パールヴァティについても同じだと見るべきでしょう。実のところ、ブラフマンとマハーマーヤーの真の性質はどちらもサチダーナンダで同一ですが、マハーマーヤーはブラフマンの神としての「力」でもあります。協会の毎日の夕拝では、『チャンディー』の中の母神への聖句を連祷（れんとう）します。

om sarvamaṅgalamāṅgalye śive sarvārthasādhike |

śaraṇye tryambake gauri nārāyaṇi namo’stu te ||

sṛṣṭisthitivināśānāṁ śaktibhūte sanātani |

guṇāśraye guṇamaye nārāyaṇi namo’stu te ||

śaraṇāgatadīnārtaparitrāṇaparāyaṇe |

sarvasyārtihare devi nārāyaṇi namo’stu te ||

jaya nārāyaṇi namo’stu te jaya nārāyaṇi namo’stu te |

jaya nārāyaṇi namo’stu te jaya nārāyaṇi namo’stu te ||

おお、幸あるもののうちで、 最も幸あるお方よ！

おお、シヴァの妻であるお方、すべての祈りを 叶えてくださるお方よ！

私たちの唯一の避難所よ！

おお、三ツ目のガウリよ！

おお、ナーラーヤニよ！

あなたを礼拝いたします

すべての創造、維持、破壊を超えた力を持つお方よ！

おお、永遠なるお方よ！

おお、グナの土台であり、グナの現れであるお方よ！

おお、ナーラーヤニよ！

あなたを礼拝いたします

あなたに庇護を求める低き者、苦しむ者を救おうと常に愛を傾けてくださるお方よ！

あらゆる悲しみ、苦しみを打ち破るお方よ！

おお、母なる神よ！

おお、ナーラーヤニよ！

あなたを礼拝いたします

おお、ナーラーヤニよ、あなたに勝利あれ

あなたを礼拝いたします

おお、ナーラーヤニよ、あなたに幾度となく勝利あれ

あなたをくり返し礼拝いたします、おお、ナーラーヤニよ！

ヴェーダーンタ協会の聖なる三位の一人であるホーリー・マザーは、マハーマーヤーの現れです。マザーはあらゆる物事を良い方へと導いてくださる方で、望みを叶えてくださる方です。困ったことがあったらマザーに心から祈れば、必ず助けてくださいます。

## 執着の根源

さて、『チャンディー』のスーラタ王と商人サマーディの話に戻りましょう。マハーマーヤーの神の遊びに関する物語を話して説明した後、森の庵に住まう賢者メーダスは王の質問に対する答えとして、マハーマーヤーに祈りと礼拝を捧げればあらゆることを取り計らってもらえると説明しました。王とサマーディは川の土手に行き、マハーマーヤーの像を造って祈りと礼拝を捧げ、マハーマーヤーの瞑想を始めました。激しい祈りと礼拝で血を流すほどでしたが、この血も母なる神に捧げました。このようにして3年が過ぎた後、母神が姿を現しました。母神は二人に「望みは何か」と尋ねました。スーラタ王は、敵をすべて倒して王の座に返り咲く力が欲しいと言いました。サマーディは、「私」と「私の」という執着から解放されるよう母神の恵みを乞いました。「私」と「私の」という執着は、自分の家族や友人、仕事への執着の源であり、肉体や感覚、心、知性から生じます。私の体、私の家、私の夫、私の妻、私の子供、私の学歴という気持ちが生まれ、すべての執着が生まれます。「私」と「私の」には、私たちの真の存在である純粋意識は含まれません。つまり、王は敵に勝つ力と権力という一時的なものを望んだので、執着や苦しみの根源は残ります。一方、商人は執着を取り除くことを願いました。『チャンディー』は、サマーディの方が賢いことを示しています。いずれにしても、母神は二人の願いを叶えてやりました。

私たちも何を祈るか選ぶことができます。スーラタ王のように一時的なものを願いますか、それともサマーディのように霊的なことを願いますか。真に賢い人は、サマーディのような祈りを母なる神様に捧げて、永遠の平安と至福を得、満たされた人生を送るでしょう。